
スピリットー魂の集う場所ー

穉田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スピリット―魂の集う場所―

【Nコード】

N3101BA

【作者名】

穉田

【あらすじ】

10年前に突如発生した。悪魔の襲来。それは平和な日本を一瞬で絶望へと変えた。森は荒れ、川は濁り。建物は廃墟と化した。人間達は死線をさまよう。

そんな時に現れたのは聖剣エクスカリバーを使い、精霊を使役し戦う勇者であった。

その者の活躍により、日本は安堵に包まれる。

しかし、悪魔の進行は収まることはなかった。

政府はその勇者に部隊長を頼み、今という精霊重騎士団^{ホーリナイト}を立ち上げた。その者達の戦いにより。悪魔は絶滅した……。と思われた。

それから、10年後。

さらなる戦いが待ち受けていた……。。

サモナー

動物には靈魂が宿つていられると言われている。

その魂の形は必ずしも、一つではない。

魂を物理化し、戦わせるもの達がいる。

彼らをサモナー（精霊使い）という。

この物語はそんな、サモナー達が集まる。学院で起こるお話。

校長「ほっほっほ。新入サモナーの諸君。お初にお目にかかる。この聖獣木学園の校長をしておる。早乙女じゃ。よろしく頼むよ。ほっほっほ。君たちはこの難問という門を破り、この学園に入学した。秀才ばかりじゃ。胸を張っていいんじゃぞ。君たちはこの学園を経て、立派なサモナーになれるよう。努力を怠らず、頑張るのじゃぞ。それでは君達の活躍を祈り、この言葉を捧げて。終わりとする。」

校長「自分の未来は自分で掴む。また同じように相手の未来は相手が決める。ただし、困難は付き物。それを助けるのが仲間じゃ。この学園では一人ではこなせないものばかりじゃ。そのために最初の君たちの仕事は仲間。パートナーを作ること。それでは新入サモナーの諸君。また会おう。」

祝いの言葉

僕は今。長々しい校長先生の話を眠い顔を擦りながら、眺めていた。こんなに長い話を聞いたのは久しぶりだ。小学生の頃の校長先生を思い出す。外で集会をするときは禿げた頭がやけに眩しかった。それに比べたら、目の前にいる人は白髪でやたらと髪が長く、ヒゲももっさもっさ。いかにも大長老の精霊使いみたいなオーラを醸し出している。

世の中にはこんなお爺様がたくさんいるんだろうな。と、考えつつ。前を眺めていた。

校長先生の「仲間を作れ」という言葉が耳に入り。長い話がおわった。

「ダチか」

つい言葉を漏らしてしまったが、俺は友達を作るのが下手くそだ。そもそも、人間関係が苦手だ。だから、家から離れたく、この学院の門を叩いたのだ。

サモナーが必要とされている時代ではあるが、俺にはあまり関係ない。普通に精霊が使えるなんて、面白そう。そんな甘い考えで受験して、今に至るわけだ。

教頭「それでは新入サモナー諸君は食堂に移動してください。ささやかなパーティを用意しています。それではAクラスの方から移動してください。」

そういうと、Aクラスの先頭から動き出した。この学園には三年生まであり、Eクラスまでの5クラスがある。クラスわけには意味があるらしいが。Aが決して、強いという訳ではないらしい。

ちなみに俺のクラスはCクラス。周りをみた感じ、いろんな奴がいた。優等生ばかりかと思っただが。茶髪の奴とか、お宅ぼいやつ。そ

れにタイプの女の子もいたりした。これからの三年間楽しくなりそ
うだ・・・。

食堂ではお静かに

教頭先生の案内により、俺たちCクラスは食堂に来た。
到着した後は先輩にテーブルまで案内してもらった。

テーブルはとても長い長机。木で作られているとは思っただけ。
なぜか光っている。魔力でも帯びているのだろうか？
そこまで魔術とかに詳しくない俺でも見える。

案内してくれた先輩に聞いてみたところ。これは普段から魔術に慣れるために作られているらしい。

ここだけではなくて、至るところに魔力で生成された物があるらしく、すぐに慣れると言われた。

席に座っていると、隣にタイプの少女が腰掛けた。ショートヘールロングの中間辺りの髪型に少し髪の毛に茶色が混じっている。
顔も整っていて、胸もそこそこあった。

「や、やべ！可愛いかも・・・。」

女性との交流もなかった俺にトークを繰り広げることなんてできない。自分の情けさに腹が立つ。せっかくのチャンスがー！

「あ、あのー」

隣から可愛いらしい声が聞こえた？

俺は恐る恐る、少女を見た。

横姿から見たとおり、とても可愛い子だ。

緊張のあまり、俺はなかなか声を出せなくなっていた。

や、やばい！なんて、話たらいんだ！！

「き、聞こえてますか？」

「は、はひ！」

し、しまった。声がうまく使えねー！

こんな時はどうしたらいいんだ。

と、そんな時に俺の前の席に一人の男性がやってきた。

「すまん、うちのダチが。そいつ、会話苦手なんだわ。許してやってくれよ。」

こいつの名は西城明^{さいじょうあきら}。俺の唯一の友達。引ッ込み思案だった俺に剣道部という部活を紹介してくれ。色々、手助けしてくれる良い奴だ。

「あ、アキラ・・・サンキューー」

こんな時でも頼ることしかできないのは情けない・・・。

明は目で合図を送り、俺にまかせると、言おうとしているように見える。

まあ、俺にはこの状況は打破できないので、まかせることにした。

「お初っす。俺、こいつのダチやってます。西城明います。で。こっちは西口隆。西つながりっす。君の名前はなんて言うの？」

さすが、明。こんな状況でも巧みに言葉を操っている。

「はい。私は西島明奈と言います。偶然にも西つながりですね。」

につこり笑った、西島さんの笑顔は素敵で、その気品あふれる姿に俺は目を奪われていた。

「お、偶然っすね。今後ともよろぴくっす。」

「ぴくっす、て・・・。」

少女はクスクス笑いだした。

こんな子と一緒にクラスとは。感激だ。

「隆、そろそろ。しゃべれるか？」

明は俺の性格をわかっていた。たしかに自ら喋るのは苦手だが、途中から介入する分には大丈夫なのだ。ようは自発的言動が苦手なのだ。

「あ。どうもです。西口隆です・・・。よろしくな。」

「あ。はい。こちらこそよろしくお願いします。」

なんとか会話は交わせたが、練習しなきゃだな・・・。

へ。こんなに施設があるんだ。

その後、俺ら三人は楽しくわいわい、喋っていた。途中から、明奈の知り合いである、守口寛子が乱入してきた。性格は明と似ていて、かなりのムードメーカー的存在。明と寛子は二人で喋り出し、俺と明奈はその話を聞くだけであつた。

食堂に到着して、約20分が過ぎた頃。一人の女性職員が食堂の一番にある台に登っていた。そこにはマイクが設置されており、それに気がついた数名は話すのを止め、前を向き始めた。うちのグループは目も触れず、話すのをやめなかつた。

「お静かに。新入生のみなさん。初めまして、この学園の施設長をやっています。篠原明美です。」

改めて、皆さん。ご入学おめでとうございます。今後の活躍を期待しています。

ええ。只今の時刻は5時50分。今から10分間、施設についてのご説明を簡単にしますので。

耳をこちらに向けるようお願いします。」

今からお世話になる家でもあるしな。校長先生みたいに長話にはならなさうだから、聞くことにしよう。喋っていた二人も真面目に前を向いているようだし。

「では1つめ。この学院の敷地内からは出ることは禁じています。

外出届けを出した者のみにだけ許します。この学院を出て、右のほうに行くと、大型のショッピングモールが建てられています。衣料品・食料品・魔力品など。必要な物はそこで補充してください。

2つめ。学院の左側をずっと真つすぐ行くと。精霊の木があります。

ここへは立ち入らないでください。

3つめ。この学院を真つすぐいくと。様々な施設があります。基本出入りは自由ですが、新入生の皆さんは先輩が同行の元お願いします。寮への移動は先輩達に案内をお願いしていますので、心配なさらないでください。

そして、最後にこれは重要なことなので、しっかり聞いてください。皆さん、ご存知だとは思いますが。悪魔の襲撃なども考えられます。悪魔は魔力を感じるとそこに群れて来るという習性があるので。普段は強力な結界が張られていて、悪魔は来ませんが、もしも。侵入してきた場合。全ての建物が赤色に変色するよう作られています。そうなった場合。この食堂に集まってください。

これはお願いではなく、命令ですので肝に銘じてください。以上です。」

そういうと、施設長は台から降りて、所定の位置へと向かっていた。

ここの敷地内に入ったときは建物の量に驚かされて、気絶しそうにもなった。まあ、こんだけのサモナーを育成するには当たり前か・・。

木の根は食べれますよ

施設長の話が終わると、台に一人の料理人らしい服装をした人がのっそりとやってきた。恐らく、料理長と思われる。

「新人生諸君。入学おめでとう。料理長の早乙女源郎じゃ。源さんともよんとくれ。では、さっそく。お腹がすいてきている時間ではあるうし。食事のタイムといきたいと思う。」

源さんという人はいかにも料理を何年もしてきたという感じの人で愛着が持てる。料理は運ばれてくるのだとは思うのだが、周りの人を見ると料理人は5・6人しかいなかった。

こんな、たくさんの方の料理を作るにはもつといってもおかしくないとは思っただけだな・・・。

それにどうやって、テーブルまで運ぶんだろうか？

「それでは諸君。目の前のテーブルに注目するんじゃ。」

俺は目の前を見た。

「おー。この目の前の木のテーブルが夕食かー。いただきまーす。」
もしかしたら、食べる木で出来ているかもしれない。ではかぶりついてみるか・・・。

「あーん。・・・。」

歯がごりつと言った。

それを見ていた、明奈がマネして。目の前の木のテーブルを一口。

「か、かちゃい・・・。」

「こ、こちら。明奈！これは食べ物じゃないって、それに明！！あんたも見えてないで、隆君を止めてよ！」

さつきまで騒いでいた寛子が慌てて、俺等を止めようとしていた。恐らく、このメンバーの中では唯一の常識人だと俺は思った。

「あ、あんたら。これが食べ物だって、なぜ思えるのよ！！とりあらず、前向きなさい、源さんのほうをよくみなさい。」

言われるまま、前を向くと。源さんが手を合わせている。何かを詠唱しているようにも見える。

食事前のお祈りだろうか？

すると、源さんの後ろから、なにやら金色の色を纏った影が出現し始めた。

「ヤム・カアシユよ。我ら同士に寛大な恩恵を・・・。」

影から物理型に変わっていた。その姿はトウモロコシの冠をした若い青年の姿であった。

これはマヤ神話にでてくる農業と自然の神とされている青年だった。ここに入学するために一般的な精霊の勉強はしていたために理解することができた。

源さんが詠唱を終えると、続いて。周りにいた料理人達が詠唱を始めた。すると、同じように影がでて、物理化していった。

「彼らに恩恵をオオゲツヒメ！」

「我らに祝福をカーバンクル」

次々に精霊を召喚している。どれも、高霊と言われる。契約が難しいとされている、精霊ばかりであった。料理人ではなく、本物のサマナーでもあるのだろう。

全員の精霊が終わると、当たりを見回し、源さんが頷いた。

「ユニゾン・ハ食」

両手を上げて、神に大して慈悲を求めるような体勢をしていた。すると、空からキラキラと雪のような物が食堂を包み込むようになってきた。

「きれい・・・」

明奈は空を見上げて、今にも泣き出しそうな姿を見せていた。あまりにも綺麗で俺も泣き出しそうだった。

そんな俺達が空に目を奪われていると、テーブルが光り出した。そして、いろんな食べ物が出始めた。

どれも今まで見たことがないような物ばかり、恐らく。この料理たち魔力の帯びているのだろう。

しかし、なんと旨そうなんだ・・・。ヨダレがでそうなほどだ。

「では新人生・在学生の皆さん。テーブルに手を置いてくれたまえ。」

俺達は今の現実を受け止めるのがやっとで、なんだかわからないまま。テーブルに手を置いた。」

「ヤム・カアシュよ。彼らに器を。」

源さんが精霊にそう頼むと、いつの間にか俺らの手にコップがあった。

いきなりなので、驚いて。椅子から落ちて、尻餅をついている人もいた。前の席にいた、明も珍しく我を忘れて、目が泳いでいる。かなり、ぼーっとしている。

「それでは動揺している人もいるが。乾杯!!」

源さんの号令とともに入学初日の夕食が始まった。

食事はゆっくりね

「う、うまい。こ、これも!」

明はテーブルにある、マジカルフード（魔法の食べ物）を口にほうばる。顔が饅頭みたいに膨らんでいる。

「明。そんなに口に放り込むと、喉に詰めるぞ。」

「おう。わかった。」

何を言っているのか理解不能だ。明はすでに自分の器に入っていた、魔水を飲みきっていた。

俺はそんなにのどが渴いてないことだし・・・。

「ほれ、これ。これ飲んで落ち着け。」

「もにゅもにゅ。」

もにゅもにゅ?

隣からケラケラ笑い声が聞こえる。明奈が吹いた。

「ふふふ。あはははは。もにゅもにゅー。」

「あ、明奈。どうしたんだ!？」

こんなに笑ってる明奈もまた可愛い。可愛いんだけど・・・。めっちゃ、むせながら笑ってる。喉にでも詰めたんじゃないだろうか。

「こ、こら。明奈、落ち着きなさい。」

寛子が自分の魔水をなんとか飲ませようとしていた。まるで、明奈の保護者だ。

「この子。変なところでツボるから。気にしないでね。」

たしかにツボの入りどころが、変だ。しょうもないことでも笑えるとはある意味、天が授かった力だな。でも可愛いから許す！もう、俺は心に決めた。この子を彼女にしてみせる！

「お、おい。隆！これ食ってみろよ。見た目はグロいけど、中身はぷりぷりで外はふわふわ。めっちゃうまーぜ。」

明が勧めてきたのは食べ物ではあるのだが……。見た目は目ん玉のように見えなくはない。これがふわふわで中身がぷりぷりな訳がない。

「あ。遠慮しておきます。」

「んな、こと言うなよー。いいから、いいから。」

口に無理やり入れようとしている、男にされても嬉しくない。しかし、モノは試しだ。

「い、いただこう……。」

俺は口を大きく開けた。臭いはそこまで生臭くもなく、いい匂いがしてくる。綿菓子とプリンを重ね合わせたような臭い。甘い砂糖の臭いがする。

パクリ！

「……うまい。うまいぞ、これ！」

「だろだろ、次はこれ食べ。次はこれな。次は！」

永遠のループが始まった。俺たちは二時間永遠に食を楽しんでいた。もう腹はパンパンだ。こんなに食っても、腹が痛くならないのは。食物にはいった魔力のおかげであろう。同時に体に魔力をいれたことにより、たぶん。ただの一般人から魔術師にはなれただろう。魔術師になるのは簡単だ言われている。ここからが厳しい世界。精霊を使役。それを召喚、時には武器化して、戦う。

最初の話であった、精霊の木というのは恐らく。精霊と契約する場所ではあると思われる。

自分がどんな、精霊契約するのか楽しみだ。剣道が得意だから、剣に武器化できる精霊がいいな。

腹も満腹だし。そろそろ、寮への移動かな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3101ba/>

スピリットー魂の集う場所ー

2012年1月8日22時46分発行